

団体の概要	団体名	<b>特定非営利活動法人 赤目の里山を育てる会(三重県名張市)</b> <a href="http://www.e-net.or.jp/user/ecoakame/npo/index.html">http://www.e-net.or.jp/user/ecoakame/npo/index.html</a>		
	活動開始年	西暦1996年 2月 活動開始 西暦1999年 4月 特定非営利活動法人格取得		
	メンバー	人数	<役員数> 10名                      <事務局スタッフ数> 3名(無給3名) <ボランティア数> 20名              <賛助会員数> 15名 <その他> 個人会員 208名	
		構成	男女 半々 大都市居住者多い 会社員 主婦 退職者など	
	予算規模	平成13年度概算 ・収入 1300万 ・支出 1300万		
団体の目的		名張市南部丘陵地の保全活動を行い、公共の福祉を実現する 等		

#### ボランティア活動の概要

「赤目の里山を育てる会」は名張市赤目の丘陵地を開発から守るために結成された団体であり、「住民自らが行なう環境アセスメント」「ゴルフ場計画の対案としての事業拠点の創立」「里山の魅力を講座として売り出す『里山総合講座』の実行」など、里山の魅力をとことん引き出す様々な事業を展開している。

同会は、1997年より名張市立赤目小学校との「里山自然体験学習」を実施している。内容は「同じ児童を同じ場所へ季節を変えて4回訪れて、自由に里山の自然を満喫させる」ことで、4年生の児童が対象。

「赤目の里山を育てる会」スタッフ(事務局長ら)は同小学校の「特別非常勤講師」であり、教師とともに一緒になって遊ぶことを仕事とする。学校と里山は3.5キロ離れており、村の生活を感じながら歩く。

子供達は春に自分の木を決めて、その木と一緒に毎回写真を取り、学校に帰って、その木を中心とした絵を描くなどの活動をする。

1年で4枚の絵を描き、60名・240枚の絵を、福祉センターのような場所で「絵画展」として展示する。その時に鑑賞したお年寄りとの郵便によるやり取りも始まっている。

#### 活動を立ち上げた経緯

名張市赤目の丘陵地でゴルフ場や産業廃棄物処理場の開発計画が持ち上がり、それに対抗する策として、土地の買い取りを進める「ナショナル・トラスト運動」等、里山を守る

ための活動を行う団体として1996年に「赤目の里山を育てる会」が設立された。

赤目小学校の教師は、この会の活動が新聞によく出るので、一度学校に招いて、生徒たちにその話を聞かせてやりたいと思っていた。そこで、代表者に会いに行ったところ、里山の「とんぼ池」に連れて行かれた。そこで西に傾く夕日を見て感動し、教室で話を聞かせるのではなく、子供達をこの地に連れてきてこの自然のすばらしさを体験してもらいたいと思った。こうして活動が始まることとなった。

#### 活動を行ううえでの困難点と工夫

赤目小学校は「人権総合学習」に古くから取り組んでおり、自分を好きになり、周りを好きになり、地域を好きになるという「自尊感情」を重視していた。そうした学校側の姿勢と、NPO側の姿勢が合致しているため、特に困難な点はない。

自然のあるがままの姿を、全身に感じさせようと思う心が一番大切であり、「みんなが里山にくることが、里山が喜んでいる」といつも、呼びかけている。

#### 学校との連携を行う際の工夫

<工夫：学校側に里山の価値を理解してもらっている>

赤目小学校の先生に、赤目の里山を大切なものだと思ってもらっていることが、何より大切。また、4年生になったら、赤目の里山に行くのだということは、全校生徒に認知されている。

<工夫：学校とNPOとで協働で活動を作り上げていった>

依頼したのではなく、依頼されたのではなく、はじめの段階から学校と団体とで協働で作り上げていった。活動内容も、トンボの観察や、農業体験、赤目の里山で行われているワークキャンプに参加している国内外の子供達との交流などに広がっているが、NPO・学校の双方が互いに提案し、相談しながら進めている。

<工夫：学校との連携がNPOにメリットをもたらしている>

学校と連携することで、NPOの信頼性が上がるというメリットもあった。学校側にNPOに対する理解があり、「特別非常勤講師」(三重県の制度)としての扱いを受けている。そのため、有給であるうえ、活動中の事故に対する保障もなされている。

<工夫：保護者の理解を得ることも必要>

学校側は、活動に対する保護者の理解を得るため、学級通信などで活動中の子供達の様子を伝えるようにしている。

(団体理事によるレポート、学校関係者へのヒアリング調査、団体資料より作成)

#### <事例のポイント>

「里山体験学習」の内容は、自然に親しむだけでなく、絵を描くこと、農業体験、国内外の子供達の交流など、多岐にわたっている。これらを学校側・NPO側が互いに提案し、相談しあいながら、つくりあげている。こうした活動の多様性がマンネリ化の防止につながっている。また、双方が相手を尊重しあいながら、主体性をもって取り組んでいる様子もうかがえる。

活動のきっかけは、担当教師が実際に「里山」を往訪したことである。学校との連携においては、教師の理解を得るきっかけづくりが重要であることを示している。

一方、この「里山自然体験学習」は、学校側の担当教師が替わっても、7年間引き継がれている。きっかけは1人の教師であっても、それが継続していくためには、学校側が活動に求めている狙いや目的が明確になっていること、それらをNPO側と共有していること、そして双方が主体的になって、相互に尊重しながら活動を行っていくことが重要であると言える。